

No.89 A WORD FROM ANOTHER WORLD



Bringing People a Little Closer Hannah Hayden

Before coming to Japan, I was a teacher in the US. I taught elementary students in several states. Then, I moved to teach English Language Learners from Mexico, Guatemala, and Honduras. I spent one summer teaching students in Uganda, Africa, and another summer teaching students from Brazil, China, Russia, France, and many other countries. Coming from such different cultures, I always expect the children to be very different. In some ways, they are. I've had groups of students who are loud and love to talk with everyone. I've had students who are so shy they can barely look up from the ground. I've had students who are extremely independent, and some who are almost impossible to separate from their friends. While I enjoy all of their differences, I am always fascinated to see their similarities, too. I see the way they light up when they see their friends. I watch as they laugh when I make a silly face or use a funny voice. I know the big eyes and familiar shouts of "Wait! Just one more minute!" when I say it's time to start a quiz (※). Whenever I notice these moments, it makes me think about how connected we really are. Once, I joined a group of students to sing the song "Do You Want to Build a Snowman?" I sang in English, while the kids around me sang along in Spanish, Portuguese, Chinese, and Russian. I will never forget that special moment of enjoying something together despite our different cultures, backgrounds, and languages. When we find ways to be connected to people, no matter where they're from, I believe it brings the world a little closer.

【ちょっと豆知識】宮地晶子

クイズquiz (※) という言葉が出てきました。「小テスト」と訳しました。日本では「クイズ」というと、テレビのクイズ番組のように問題を出して、それに答える遊びを意味しますが、ちょっとした試験の意味で使うことも多いです。また、発音ですが、アルファベットの [q] は [u] と仲良し。これは [kw] と同じと意識して、はっきりこってり発音します。クエスチョンquestion がそうですが、「クエスチョン」にならないように気をつけましょう。

人のつながりをより密に ハンナ・ヘイデン

来日する前は、米国のいくつかの州で小学生の指導をしていました。その後、メキシコ、グアテマラ、ホンジュラス出身の英語学習者を指導しました。また、ある夏はアフリカのウガンダで指導し、また別の夏は、ブラジル、中国、ロシア、フランスやその他多くの国出身の児童に指導しました。これだけ多様な文化圏の子ども達なら、さぞ違うだろうといつも思いますし、実際違いもします。賑やかで誰とでも話すのが大好きな生徒のグループもいれば、内気過ぎて、ほとんど真下を向いて顔も上げられない子どももいました。極端に独立独立歩な児童もいれば、友達と引き離すのがほぼ不可能、という生徒もいます。こういう違いもそれはそれで、どれも楽しいのですが、彼らの持つ共通点にはいつも魅了されます。友達

を見つけたときにははじける笑顔。私がおかしな声を出すと笑うその声。小テストの開始を告げると目をむいて「待って!あと1分!」と叫ぶおなじみの声。こういう瞬間に気付くと、私たちはみんなつながっていると思わされます。一度、生徒たちが「雪だるま作ろう」を歌っている輪の中に入ったことがあります。英語で歌う私と、スペイン語、ポルトガル語、中国語、ロシア語で歌う子どもたち。文化や生い立ち、言語の違いを越えて、何かを一緒に楽しんだあの特別な瞬間を忘れることはないでしょう。どこの国の人とであれ、つながる方法が見つかれば、世界を少し近づけられる、と信じています。

(訳:宮地晶子)

英語教育指導員 宮地晶子の

エイゴノマナビカタ

第156回

足踏みして暗記!

中学校では定期的に英語暗唱テストを行います。生徒には少なからぬプレッシャーで、具合が悪くなる子もいます。「緊張してど忘れしました」とはよく聞く台詞です。残念です。

ある日、夫が「いい解決法があったよ」と教えてくれました。それはNHKラジオ「冬休み子ども科学電話相談」という番組でのこと。

これは「キュウリのつるはどうして巻き付くの?」「なぜ

南の海の魚はカラフルなのに北の海の魚は地味なの?」などという子どもたちの疑問に専門家が答えてくれる番組です。そこに「落語を完璧に覚えたつもりでも、突然忘れる」という相談があったそうです。回答者の先生は「暗記をするときは動作付きでやった方が覚えられる」「絵を描くようにイメージしながらだと、ど忘れしない」とアドバイスしていました。これは私がいつも思っていることと一緒にです。

新しかったのは、「本番ドキドキすること」についての対処法。暗記する時から「足踏みしたりして心拍を上げて、本番のストレス状況に近くする」と良いのだそう。面白い!心拍を上げるなんて新しい!自分を鏡で見ながらでも上がりますよ。やったことありますか? 恥ずかしさで汗が出ます。がまの油のような感じ。ぜひやってみてください。効果てきめんです。

外国語習得に暗記は避けて通れません。しかもそれは徹底的なものでなければ意味がない。ここは曲げられない。とはいえ、かく言うワタクシ自身は、昨年急から急に人の名前がきれいさっぱり出てこなくなりました。見事な老化現象です。「冬休み子ども科学電話相談」に電話してみようかしらん。